



TITLE:

<Book Review>Mantaro J. Hashimoto. The Hakka Dialect: A Linguistic Study of Its Phonology, Syntax and Lexicon. Cambridge University Press, 1973, xxvi+580p.

AUTHOR(S):

西田, 龍雄

CITATION:

西田, 龍雄. <Book Review>Mantaro J. Hashimoto. The Hakka Dialect: A Linguistic Study of Its Phonology, Syntax and Lexicon. Cambridge University Press, 1973, xxvi+580p.. 東南アジア研究 1973, 11(3): 433-438

ISSUE DATE:

1973-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55746>

RIGHT:

書 評

Mantaro J. Hashimoto. *The Hakka Dialect: A Linguistic Study of its Phonology, Syntax and Lexicon*. Cambridge University Press, 1973. xxvi+580 pp.

西 田 龍 雄*

Princeton-Cambridge Studies in Chinese Linguistics シリーズの第一冊 *Studies in Yüe dialects 1* (橋本夫人余靄芹著 1972) につづいて、その第二冊として、本書『客家方言』が出版された。著者橋本萬太郎氏は、プリンストン大学の中国語学 project を主催し、中国語学・一般言語学の専門家として内外に広く知られている。現在は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授である。

本書は、つぎの六章から構成されている。(1) 序説 客家とその言語 (pp. 1-34) (2) 客家音韻論 (pp. 34-121) (3) 史的音韻論 (pp. 122-409) (4) 客家語の特質 (pp. 410-441) (5) 客家語統語論 (pp. 442-524) (6) 語彙 (pp. 525-553) 註 (pp. 554-564) 文献目録 (pp. 565-580) ほかに挿図2種(客家移動図、客家分布図)が含まれる。

まさに、客家語を対象とした最初のまとまった言語学的な研究であると言える。著者は、本書を出版する以前に、すでに1957年以降、客家語について数篇の論文を発表しており、その中で、1959年に出た *Hakka phonemics-the phonetics of Moi-yan dialect and its phonemic system* (『言語研究』No. 35) はその代表作で、本書第2章のもとになっている。

* 京都大学文学部

る。またこの書物とほぼ時を同じくして、アジア・アフリカ言語文化研究所から『客家語基礎語彙集』とその索引が出版された。それは大へん有用な資料であるが、そのはしがきにも「四県客家語の音声論」が掲載されている〔四県とは、広東省梅県の平遠、蕉嶺(まえば鎮平)、興寧、五華(まえば長楽)を指す〕。

客家語は、官話、呉方言、粵方言、閩方言と並んで漢語のいわゆる五大方言(いまでは北方方言、呉方言、湘方言、贛(かん)方言、客家方言、粵方言、閩南方言、閩北方言に分ける8方言分類のほうが多く採用されるが)の一つとして、広東、福建、江西、広西、湖南、四川、台湾に広く分布し、マラヤ、インドネシア、タイなどに居住する華僑にも客家語を話す人が少なくない。この客家という呼称は、広東語起源であり、本地(当地)に対して与えられたものである。自称は客人 *hak-nyin* という。著者は南中国における分布地点として、広東省から台湾まで、全客家地域33地点、部分的な客家地域150地点計183地点をあげる(pp. 6-13)。この数字は他の報告よりも詳しく、たとえば袁家驊編『漢語方言概要』(北京、1960)では、純客家住県を32、非純客家住県95計127県全人口約2,000万人としている。

客家語は近隣の広東語・福建語から大きい影響を受けているけれども、言葉全体としては、古い北方漢語の音韻範疇と驚くべきほどの一致を示し、江西省の贛方言にとくに近く、この両者をまとめて客贛方言とする説（羅常培『語言与文化』に見られる）を著者は承認している。客家は、現代では、広東省の北東部、とくに梅縣市周辺地域を中心とするけれども、もともとは中原一帯に居住していたから、客家語と贛方言の近似は十分うなずける。そして南方地域への移動に五つの大きい波があったことは、羅香林の『客家研究導論』において詳説された。東晋から隋唐（4世紀始—9世紀末）に及ぶ第一波から、乾嘉以後（1867以降）の第五波にいたる移動説が、本書においても詳しい挿図をともなって紹介されている。

このような背景にたって、本書のもつ主要な目標は、はじめに掲げた構成からわかるように二つある。第一は、対象とする広東省梅県の客家語をいかに記述できるかの記述研究にあり、第二は、記述された客家語の音韻体系が、中古音（隋唐音）とどのように対応するのかの歴史・比較研究にある。

著者は、記述研究のうち、音韻論に関しては主として構造言語学の立場から、統語論については生成文法の立場から、それぞれ述べている。客家語の音韻論は、これまでに著者以外の立場から書かれた数種類の調査報告が単独にあるいは他の漢語方言と関連して発表されているから、まず既発表の報告といかなる点が異なるかが問題となるであろう。

本書の客家語は、インフォーマント Mr. Vong Pin fa（黄彬華、広東省梅県松源堡宝坑村出身）によるものであり、1950年代後半に東京において調査されたものである。まず Repertory of Syllables として、黄氏の口語に観察されるすべての音節を表示する（pp. 36-85）。それを基に、客家語音節表を表1-2

として提示し（pp. 86-87）、各音声についての説明（pp. 88-89）および音素分析の結果を音節、声母、韻母、声調の順に述べている（pp. 90-）。とくに声調については、pitch と stress を Pitch-stress recorder によって記録したグラフを掲載するから視覚的に声調の型を知ることができる。最後にテキストと転写例として、「北風と太陽」「李文古の故事」および唱歌2種をあげる（p. 112）。

著者の客家語音韻論に関して、なお検討の余地があると考えられる二三の点をつぎに指摘してみたい。まず梅県の客家語の子音体系は著者の分析によると、つぎの16子音からなる（p. 91）。

/b/	/p/	/f/	/m/				
/d/	/t/		/n/	/l/	/z/	/c/	/s/
/g/	/k/		/ŋ/		/ɸ/		/h/

これに対して上述の『漢語方言概要』と何炯氏の「客家方言」（『方言与普通話集刊』第四本 1958）は、いずれも17子音とし、楊福綿氏は Elements of Hakka dialectology (*Monumenta Serica* vol. XXVI. 1967. 実際は1969に出版) で、19子音とする。17子音説では /f/ に対立する /v/ を認め、19子音説では /v/ のほかに /j/ /ç/ をあげる。あとの2つは、それぞれ /ɸi-/ /hi-/ としてもよいと考えているから、19子音説との相違点もやはり /v/ を認めるか否かにある。

著者橋本教授は、海陸方言には、/f/ に対する /v/ をはっきりと認めているが（ex. fat⁶ 広い: vat⁷ 滑る）、この梅県方言では、音素 ɸ（ゼロ）を仮定し、それがつぎのあらわれ方をすると考える。3声5声の音節で、a a e o 母音のとき、声門閉鎖音 [ʔ] があらわれ、狭母音 i u のときには [j-] [v-] が聞かれる。一方、1, 2, 4, 6 声の音節では、いずれも軟かい声立てをもってはじまる。しかし、著者の資料（『基礎語彙集』）の中に、つぎの [f] と [v]

が対立するセットを見出せる（声調表記は数字にかえる）。

fi⁴ 肺 /fi⁴/: vi⁴ 胃 /ui⁴/, mien⁴ fun³ 麵粉 (こな)/mian⁴-fun³/: tsjiu⁴ vun² 皺紋(しわ) /ziu⁴-un²/, fon¹ ji³ 歎喜 (よろこぶ)/fon¹-si³/: su³ von³ 手腕(てくび)/su³-uon³/ したがって、著者のように、この vi, vun, von を /φui/ /φun/ /φuon/ (実際は φ を書かない) とするよりも、/vi/ /vun/ /von/ とした方が適切ではないだろうか。一方 [j-] については対応する無声音 [j̥-] がないから、著者のように /φi-/ とすべきであろう。

著者は、表 4 で横列 6 段、縦列 13 段計 78 の韻母の種類をあげ、それを音素分析した結果、表 6 で韻母 49 種類にまとめる。つまり 78 の中、49 種を認めて、残りをすき間とした。これは、末尾の子音に関して大幅に相補関係を認めた結果である。たとえば 92 ページの表 4 の phonemically distinct finals から、任意の例を引くと、つぎのようになる。

I	a	aũ	aĩ	am	ab [□]
III	ĩa	ĩaũ	ĩaĩ	ĩam	ĩab [□]
I	an	ad [□]	aŋ	ag [□]	
III	ĩæn	ĩæd [□]	ĩaŋ	ĩæg [□]	

このうち、末尾子音 [-m] [-n] [-ŋ] と [-b[□]] [-d[□]] [-g[□]] は、著者のいう声調の二つの運用特徴 (performance feature) すなわち滑音音調 (legato tones つまり平声) と断音音調 (staccato tones つまり仄声) と関連して相補的な関係にたっていて、滑音音調の 1. 2. 3. 4 声は末尾鼻音の音節のみにあらわれ、断音音調の 5. 6 声は、末尾が閉鎖音である音節に限られる。またこの見方をとると、口語で、たとえば [k'em³] trap door 対 [k'em²]

to hide, cover を khem³: khem² と扱えるのと同じように

[k'em⁴] <ふた付の箱> 対

[k'eb⁵] <ふたをする>

も音素交替としてではなく、khem⁴: khem⁵ のように声調の交替が形態論的交替をになっているとして扱えるのではないかという。

筆者は、これは運用特徴の重視と相補分析原則の行き過ぎた扱いであると思う。筆者は、漢語方言のみならず、漢蔵語全般にわたって音節末尾の鼻音と閉鎖音の対立のほうが、声調の対立よりもより優先すべき弁別であると考えている (cf. 上例は、チベット語に見られる対立とよく並行する。Wr. T. *sgam* “box”: *sgab-pa*, *hgebs-pa* pf. *bhab* fut. *dgab* “to cover”) もし、現代語の韻母を -Vŋ⁵ -Vŋ⁶ のようにとらえてしまうと、種々の不都合が出てくるのではないだろうか。たとえば、その歴史をあとずけるのに、中古漢語 -k → 現代語 -ŋ⁵ -ŋ⁶ のような変遷を仮定しなければならないだろう。したがって、末尾閉鎖音と鼻音の対立を算入すると、韻母の数は、著者が表 4 であげる 74 種になる (cf. 『方言概要』では 69 韻 + 3 韻、何炯は 58 韻 + 3 韻とする)。

本書の声調に関する記述は詳しい。著者のあげる客家語の声調型と、『方言概要』および何炯の声調型を対照するとつぎのようになる。(いずれも梅県方言)

	橋 本	『概要』	何炯
1 陰平声	中平 滑音音調	44	44
2 陽平声	低平 (やや下降)滑音	11	12
3 上 声	中降 滑音	31	21
4 去 声	高平 (やや上昇)滑音	52 or 42	42
5 陰入声	中降 断音音調	21 or 1	44
6 陽入声	高昇 断音音調	4 or 5	21

『概要』と何炯は、入声音を除いて概略一致する。本書で与えられた声調型は、入声に関しては『概要』に近いけれども去声は、高平（上昇）対高降で、かなり違っている。これは語音と字音の違いであろうか。これらの声調の音声特徴を著者は3つのfactorの対立としてまとめる。

- a 運用(performance) 滑音音調対断音音調
- b 高低(register) 高対非高 低対非低
- c 昇降(contour) 降対非降 昇対非昇

著者のあげるこの3つのfactorの結合関係(p. 106)をもっと簡単な形で示すと、次表のようになる。

	1声	2声	3声	4声	5声	6声
滑音	+	+	+	+	-	-
高	-	-	-	+	-	+
低	-	+	-	-	-	-
降	-	-	+	-	+	-
昇	-	-	-	-(+)	-	+

(第4声の<上昇>の特徴をプラスとしてよいのではないか)

しかし、この運用特徴は構造指定の上で不可欠のものとは思われない。もし、上述のように音節の性格を決める末尾鼻音と閉鎖音の対立を認めるならば、運用特徴は、その対立に還元され、3声と5声、4声と6声は声調で対立するのではなく、末尾の音素で対立することになり、客家語の声調は、実際には4声になってしまう。

第三章歴史音韻論では、中古音から現代客家語にいたる発展と、客家語内部の層を明瞭にする目的で中国音韻学の16攝一声調—37声母の分類基準にしたがって、中古音の枠組みに、現代梅県方言の単語と句を4,000近く対応させている。これはいわゆる字音の対照ではなく、単語乃至句を対象とした好ましい資料であり、本書の中でもっとも多い紙数を占めている(pp. 126-351)。たとえば、

果開一：歌 a

平(声) 歌(韻)

端(母) 多 to sɛu ~少

透(母) 拖 t'ɔ ha lo ~下来

のような体裁をとっている（ここでは声調表記は省略）。

新しい中国語方言学がはじまった当初から、南方方言には、各方言内部に少なくとも二つの層があって、それが体系的に区別されている事実は注意されていたが、その相違は文字の読み方の違いとして扱われていた。著者は、それを一つの方言内部における層、つまり口語層と文語層の違いとして扱いたいという。中古漢語と対照すると、少なくとも梅県方言にも二つの層があって、それが中古漢語以降の音韻変化によって起こったものと確信できる。大きい差異は、1) 梗攝韻母の対応形 2) 両唇音の唇齒音化 (p → f) 3) 上声と去声の分裂法にあるとし、それらは古い体系に異った変化規則が適用されて出来てきたとする。

現代語と中古語の対応関係を、文語層と口語層に分けて表示し、357ページ以下に詳しい説明がある。それによると、この対応関係には説明のしようのない例外形が意外に多いことがわかる。

声調の中古音からの発展は、詳しく考察されていて(p. 384)、その中でとくに問題になるのは、客家語を特徴づける上声の分裂法である。

中古音で全清と次清（無声音）の声母をもつ音節は、多くの漢語方言と同じく、客家語では3声になるが、全濁音（有声閉鎖・破擦音）は、口語層では1声に、文語層では4声にあたる。

口語層 /co¹/ 坐 /ha¹/ 下

文語層 /to⁴/ 倒 /ha⁴/ mansion

次濁音（鼻音・側面音）でも、客家語には二

つの層があり、どちらも多くの口語語彙と文語語彙を含むが、第一の層では1声に、第二の層では3声にあたる。しかし、この層の弁別は全濁字ほど素直ではない。

1 声	ma ¹ 馬	mai ¹ 買
	li ¹ 鯉	mi ¹ -ba ¹ 尾巴
3 声	ŋ ³ 五	i ³ 雨
	li ³ 李	mi ³ 米

そこで二つの rules が考えられる。

/中古上声/ → /客家 1声/ [次濁音]

/中古上声/ → /客家 3声/ [次濁音]

前者の層は、陰陽による分裂を行なう粵方言タイプで、後者のほうは、官話のタイプで声母の音韻類によって分裂した。

1 の層	全	清	} → 陰 (3 声)
	次	清	
	次	濁	} → 陽 ¹ (1 声)
	全	濁	
2 の層	全	清	} → 陰 (3 声)
	次	清	
	次	濁	
	全	濁	→ 陽 (4 声)

ところが、これには例外があって、その一つは全清次清の声母をもちながら、1声になるもの、第二に中古漢語の声母の性格に関係なく2声になる類、そのほか少数の例外として、(1) 全濁音ではないが、4声になるのと、(2) 全濁音であるのに3声になるのがある。このような不規則形の成立が、著者によって説明されているのも少なくない。たとえば /tu⁴/ 吐は、3声が期待されるが、実際には4声である。それは官話にある吐 t'u³ <吐く> と t'u⁴ <嘔吐する> の交替がないからであるという (cf. 中古音吐吐痰上声, 吐嘔吐去声) 同様に、肚が /du³/ であるのは、官話にある tu³ <家畜・魚の胃> tu⁴ <人間の腹>

の区別が客家語にないからだと考える (cf. 中古音肚胃上声, 肚腹部去声)

声調の対応関係は、どの言語でも非常に複雑な問題を含むように思える。著者はさらに進んで、他の客家諸方言との比較から、原客家語声調体系を設定する。

客家方言は広い地域に分布しているから、地域的な差異があるにもかかわらず、驚くほど均質性を示している。それは客家方言が地域的な方言群ではなく、“ethnic dialects” であるからで、その上に、客家人の間の同族意識がその言葉の統一に貢献しているという。その客家語を明白に性格づける特徴は何か。顕著な特徴として、(1) 中古音の全濁音 (ex. g. d. b. dz …) に出気音 (ex. kh. th. ph. tsh …) が対応する点、(2) 北方漢語の f- に ph- が対応する点、(3) 中古音の t̂-t̂- に t-t- が対応する点があげられて来たが、最近の中国語方言学の発達では、これらの特徴だけでは十分に客家方言を性格づけられなくなったという。潘茂鼎が1963年に客家語として分類した14の方言の一つ (『福建漢語方言分区略説』『中国語文』No. 127) 邵武方言についてわかればわかるほど、いわゆる客家語の特徴なるものは、極めて表面的なもので、その方言は全体として、閩方言であるといい、客方言に共通して見られ、他の方言群にない特徴は、上述の次濁上声と陰平声が合一する現象であるとする。

統語論の研究は、18の統語規則の提供と対話からなり、極めて簡潔に述べられている。生成文法の専門家でもある著者は、他の現代中国語方言と同様に簡単化した規則で客家語の基本構造を十分に記述できるという。基本文型として、自動詞文、他動詞文、不完全動詞文などすべて生成文法によって説明される。たとえば、不完全動詞文 樹變紅 (樹が赤くなる) は、母型文 su⁴ φ bian⁴ S 樹 φ 變 S と埋め込まれた文 su⁴ φ fun² 樹 φ 紅からな

り、埋め込まれた文の主語 su^4 が削除されて樹変紅となるなど。それらの規則の説明と対話文の間に、代名詞、数詞、量詞などが折り込まれている。

本書をみると、中国語方言学の急速な進展が強く感じられるが、このような中国語方言の詳しい記述は、他の分野、たとえば比較言語学にどのように役立ち得るだろうか。筆者は、漢蔵語の比較研究は、中国語方言の形態を考慮しない限り完成しないであろうと考えている。中国語の方言は、漢蔵語族に属する非漢語のもつ種々の現象を断片的な形で反映している。たとえば代名詞の複数形をあげてみると、客家語で、本書の著者は 1. pl. $\eta ai^2-den^3-\eta in$ 我等人, 2. pl. $\eta^2-den^2-\eta in^2$ 3. pl. $gi^2-den^3-\eta in^2$ 佢等人と、この den^2 [ten] 等にかわる $-deu^1$ の形をあげる。後者は、粵方言の $-tei$ と同源形式であろう。そしてビルマ語の /twei/ とも共通するのではないだろうか。これに対して湘方言に属する黄橋方

言では、1. pl. $'\eta\phi\ tsi$ 我儕, 2. pl. $'\eta\ tsi$ 你儕であり、この tsi は、チベット語の $-tsho$ (1. pl. $nga-tsho$) と同源ではないかと疑える。また蘇州語の 2. pl. $\eta^2-to^?$ 你篤, $\eta to^?$, $ne^1 to^?$ 耐篤 $a-to^?$ も、チベット語の $-dag$ ビルマ語の $-to^3 > t\eta$ とおそらく共通起源をもつであろうと考えられる。本書は、その方面でも、将来活用されることになるであろう。中国語方言の研究書が続々出版されることを期待する。それにしても、客家語の表記は、厳密な音素表記よりも本書 449 ページ以下に採用されている pseudo-phonemic/pseudo-phonetic 表記のほうがずっと近づきやすいように思う。

本書は 600 ページにも及ぶ大部の著書ではあるが図表が半分弱を占め、余白を含むページも多いから、編集にもっと配慮を加えたならば、より簡潔な体裁になっていたであろう。そして、もし、日本で印刷されたならば、漢字を遠慮なく挿入できて、読者によりいっそうの便宜を与えたに違いがない。